

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00144

研究課題名(和文)音楽実践がもたらす社会的情動とその機序：キューバ芸術音楽を例とした民族誌的研究

研究課題名(英文) Social affect and mechanisms of musical practice: an ethnographic study of Cuban art music

研究代表者

田中 理恵子 (Tanaka, Rieko)

東京大学・大学院総合文化研究科・学術研究員

研究者番号：50779105

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では音楽実践がもたらす社会的な情動形成の機序を明らかにすることを目的として、特異なイデオロギー形成を牽引したキューバ音響実践(1969年に創設された音響実験グループGES、及び今日の音響インスタレーション)を事例とした民族誌的研究を実施した。これらの音響実践は、一定の時間・空間という「枠」を創造することによって人びとの個別具体的な心性を結びつけ、同時に流れゆく音の「向こう」を想起しつつ乖離を生むという、制御不能な心性や身体の「振動」の諸相を示していた。社会変化の分析においてキューバの例では、マクロな社会的情動の表層よりも、こうしたミクロな社会力学的運動の重要性が浮き彫りとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今日の社会文化研究において情動研究の重要性は高まっているものの、心性や身体性といった諸活動の深淵までを包摂する研究や、社会文化の今日的な変容を射程とした研究は充分とは言い難い。これに対して本研究は、キューバ実験音楽がいかん人びとの心性や身体性を刺激し、そして社会変化として結実していくのかを、社会変容期キューバにおいて実証的に検証したものである。加えて時間性を表す音楽(留まることなく「向こう」へ流れゆく)と、空間性を表す音響インスタレーション(一定の時間・空間の「枠」を創造する)に注目することで、社会力学の微視的な運動性の一端が明らかとなり、情動研究の新たな可能性を示すことができたと考える。

研究成果の概要(英文)：This ethnographic study aimed to clarify the mechanisms of how social affect is formed by acoustic practices. Specifically, the study focused on the contemporary Cuban acoustic practices that drove the formation of a peculiar ideology - the acoustic experimental group GES, founded in 1969, and the acoustic installations of today. In these practices, uncontrollable mental and physical "vibrations" were observed, in which people's individual and concrete mentalities were linked by the creation of a certain "frame" of time and space, while at the same time evoking and diverging from the "beyond" of the flowing sound. This study presented this kind of mobility as part of the social dynamics (=social affect) that are manifested as social change in contemporary Cuba.

研究分野：文化人類学 芸術学

キーワード：芸術人類学 ダイアロジカル・エスノグラフィ 現代キューバ 音響実践 時間と空間の枠 情動 振動 制御不能

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1)「生の政治」としての芸術音楽：申請者はこれまでの研究において、キューバ音楽 *música cubana* を例として、音楽が社会と相互に影響しあいながらいかに生み出されていくのか、その一端を民族誌的に描くことを試みてきた。近年のキューバの社会状況では、「カネがない」「モノがない」という言説が渦巻いているなかで、音楽家たちは、即興的な身体や個々人の欲求に基づいて、創意工夫を重ねた活動を続けてきた。つまり彼らの音楽は、まさに生きていく実践のなかで形づくられていく「生の政治」としての音楽の諸相を浮き彫りにしてきた。

(2)「音楽実践」の民族誌的研究に向けて：このような音楽の諸相を描くために申請者は、「音楽」というカテゴリーを前提とせずに「実践」の総体として記述するという、音楽実践の民族誌的研究を採用してきた。ここでいう実践とは、音楽という音の流れが人びとの生きるプロセスにおいて生み出される様を、そのまま照射しようとする人類学的方法のことである (cf. 田辺繁治 2003 『生き方の人類学：実践とは何か』講談社現代新書、など)。

(3)「生きること living」の根源性、身体・心性・情動へ：しかしながら、今日のキューバ社会を「生きること *living*」のプロセスを明らかにするためには、より深いレベルへの注目、すなわち彼らの心性や身体のあり方などを含めた、より情動的な領域へ踏み込んだ研究を行うことが重要になってくる。これに対してキューバ実験音楽は、彼らの出自であるアフリカ系・スペイン系の音楽要素、日々を生きる心情を詠み込んだ詩などを混淆させ、人びとの情動的な領域に大きく働きかけてきた実践である。だがこうした経緯にも拘わらず、実験音楽をはじめとするキューバ芸術音楽は非西洋の周縁的な音楽として扱われ、学術研究においておおよそ取りこぼされる傾向にあった。このことは音楽人類学などの先行研究において、土着の音楽要素を重視した「領土 = 民族 = 文化 (音楽)」という図式を未だ超克できていないという課題も示唆している。

2. 研究の目的

(1) 上記1.の内容を踏まえて本研究では、今日のキューバを「生きること」の基盤となる心性や身体のあり方、すなわち、キューバ的な情動が音楽実践を契機としていかに形づくられるのか、その一端を民族誌的に描くことを目的とした。具体的にはキューバ実験音楽を例にとり、とりわけキューバ映画芸術産業庁 ICAIC 内につくられた音響実験集団 *GES (Grupo Experimental Sonora del ICAIC)* の実践を研究対象の軸として、この音楽の実践がもたらす社会的な情動に関する民族誌的記述を展開した。

(2) そもそもキューバ実験音楽は、1970~80年代に積極的に創造されるなかで、西欧の音楽様式、アメリカ実験音楽、ロシア音楽教育システム、キューバ民衆音楽などを巧みに取り込みつつ、キューバ社会全体を覆うイデオロギー、すなわちキューバ主義 *cubanismo* を牽引したという経緯がある。したがって社会運動として機能したキューバ実験音楽の諸相や、キューバ実験音楽をめぐる社会的な統合や分裂、及びキューバ実験音楽が喚起する情動などの側面に注目することで、キューバ的な情動の形成とその機序の一端が浮かび上がることが予想された。

3. 研究の方法

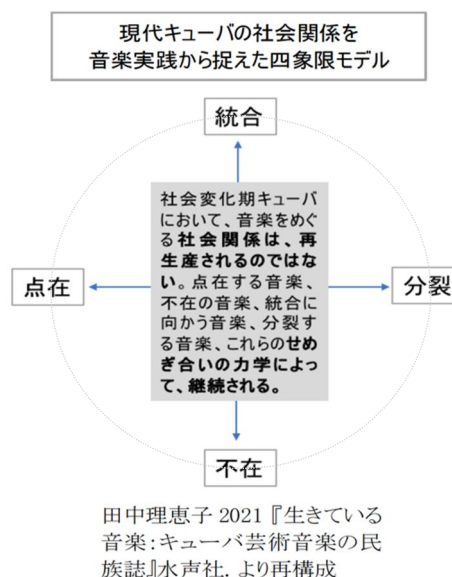
研究の手法は、文献資料調査、キューバ・ハバナ市でのフィールド調査に基づくデータ分析、オンラインでのインタビュー及びメールによる調査とし、(A)ハバナの各芸術機関(キューバ芸術家協会、キューバ音楽開発研究所)が所蔵する資料の調査、(B)ハバナ国際現代音楽フェスティバルを中心とした創作プロセスと作品の分析、(C)音響実験集団 *GES* 及びその母体である ICAIC 関係者へのインタビュー調査を主軸とした。加えて、インフォーマントの音楽家数名と対話を進めながら、彼ら自身によって演奏会・パフォーマンス・インタビューの内容を音源・映像に収めてもらう、その映像に関して対話を行うというダイアロジカル・アプローチを取り入れた。

4. 研究成果

(1) 社会変化とキューバ芸術音楽をめぐる民族誌：申請者が研究調査の対象としてきたキューバ芸術音楽は、その様相を多様に变化させながら、現代キューバにおける社会や生の变化を示してきた実践として位置づけられる。より具体的にいえば、キューバを象徴するイデオロギーとして描かれてきたキューバ芸術音楽は、革命以降にはプロパガンダ音楽として人々をまとめ上げる一方で(統合の経験)、経済危機時はヒト・モノ・カネが不足する社会状況を明るみにし(不在の経験)、近年の改革では経済効果を主眼とする文化政策が各地で促進された(点在の経験)。

こうした変化の一方で、人びとの音楽経験は多様化し(分裂の経験)、彼らの実践は社会文化との関係を築いてきたというよりも、いかに現状を変化させ、あるいは応答しながら生きていくのかという、いわば社会変化の動力とも呼ぶべき側面として、現代キューバの動態を浮き彫りにした(図1)。

(2) キューバ音楽の変容と「よく生きること」: 上記の民族誌的内容を踏まえ、現代キューバの社会変化を音楽実践の場(フィールド)で捉えようとするならば、問題の本質は、芸術・民族・社会・個人といった領域のいずれにも還元されえない、言うなれば主体なき集合行為とその絡み合いの動態にある。さらに社会変化のなかには、音楽は社会的に再生産されるような自明の現象ではなく、そこに「在り続ける」ことに向けて、既存の社会関係の改変や切断を「し続けている」ことで維持される実践だと言える(同じく図1)。



(3) 共有される / 共有されない音響実験集団 GES の経験: 以上の民族誌的考察及び理論的素描をもって音響実験集団 GES に焦点を絞るならば、革命政府によって 1959 年に ICAIC (映画芸術産業庁) 内に創設された GES は、その中心となったレオ・ブローウェルをはじめとする著名な音楽家たちによって、一方でプロバガンダ的な表象をもつ芸術音楽を、他方でヌエバ・トロバと呼ばれる民衆音楽を創造するなど、「キューバ主義」の形成に關与する多角的なムーブメントを起こしてきた(諸外国で高い評価を受けると同時に、それと比較してキューバ国民に浸透する音楽とはならなかった、といった複雑な評価も含めて)ことが文献資料と紐づけて整理された。

そうした経緯からか GES の実践に関するインタビューでは、概念的にもその根底にある感情や感覚などの内容においても、ある種の定型化された言説が繰り返されていた。しかしながら次第に、とりわけ「うた」「ことば」「声」についての語りにおいては、「身体に入る」「身体が震える」などの個々人独自の身体的経験も語られていった。このことから、GES の実践が社会的な情動形成にいかに関わってきたのか(概念・感覚・感情が共有される / 共有されないことの重要性など)その輪郭が垣間見られた。

(4) 音響インスタレーション、音響映像の経験: 上記の見られる、音楽経験の音声的な側面及び身体的な側面に注視しつつ、今日の音響インスタレーションに対象を広げて検討を進めるならば、インフォーマントの音楽家数名に収めてもらった演奏会やパフォーマンスの映像において、同じ音響インスタレーションを記録した二つの映像に興味深い対比が見られた。A 氏の場合、演奏する身体の動きやフォームを執拗にアップで記録する「身体へのビククローズアップ」の眼差しが顕著である一方、B 氏の場合、演奏とは一見無関係な空・部屋・街といった「光景へのビッグロングショット」がそのほとんどを占めていた。二人はいずれも収録した音響インスタレーションを高く評価しつつも、互いの映像に関しては批判し合うこととなった。

さらに、音楽家たちが好んで用いる音響映像(作品の映像化、映像としての音楽作品など)とも比較検討を進めるならば、そこには一見すると音楽とは無関係な、空、海、石、葉脈、虫などのカットが多用されていた。この点に関してインタビューを重ねたところ、それらの光景はそれぞれ異なるものの、彼らにとって「キューバ」「ハバナ」を彷彿とさせるものであったり、漠然と何らかの「共感」を喚起したりするものであり、また音楽の経験と等しいものなのだという。

以上の内容を重ね合わせると、これらの音響インスタレーションや音響映像の実践においては、場所や映像といった一定の時間・空間の「枠」が創造されることで、人びとの個別具体的な心性が結びつけられながらも、流れゆく音の「向こう」を想起させ乖離させるという、制御不能な心性や身体の「振動」が見て取れた。社会変化の分析において現代キューバの音楽実践の事例からは、マクロな社会的情動の全体よりも、こうしたミクロな社会力学的運動の重要性が浮き彫りとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 田中理恵子	4. 巻 5
2. 論文標題 表出する情動、試論：「建てること」をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 嗜好品文化研究	6. 最初と最後の頁 101-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田中理恵子	4. 巻 20
2. 論文標題 In Between Art and Anthropology: from G. Bateson and T. Ingold	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京造形大学研究報	6. 最初と最後の頁 165-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田中理恵子	4. 巻 1
2. 論文標題 街に出よ：芸能愛好者の語りと地域実践の手触り	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 <アートする>ウェブマガジン-オイド（特集「コロナ禍と協働的なアートのゆくえ」）	6. 最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田中理恵子	4. 巻 33(1)
2. 論文標題 芸術がまなざす地域と関係	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文教大学国際学部紀要	6. 最初と最後の頁 41-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田中理恵子
2. 発表標題 「反響」の語り：都市ハバナに生きる人びとの感覚と感情をめぐる空間
3. 学会等名 日本文化人類学会第55回研究大会（分科会「リノゾナンスへの人類学的アプローチ：音楽とパフォーマンスのフィールドから」）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中理恵子
2. 発表標題 感性・制度・共同幻想：キューバ芸術音楽にみる「良きもの」と「流れゆくもの」
3. 学会等名 国立民族学博物館共同研究会「感性と制度のつながり：芸術をめぐる『喚起』と『評価』のプロセスから考える」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中理恵子
2. 発表標題 もう一つの音楽嗜好症(ミュージコフィリア)：キューバ音楽の共有と「満たされなさ」
3. 学会等名 日本文化人類学会課題研究懇親会「嗜好品の文化人類学」2021年第1回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中理恵子
2. 発表標題 制度の再生産と差異をめぐる場の力学：ハバナの音響実践から
3. 学会等名 国立民族学博物館共同研究会「感性と制度のつながり：芸術をめぐる『喚起』と『評価』のプロセスから考える」
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 田中理恵子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 388
3. 書名 生きている音楽：キューバ芸術音楽の民族誌	

1. 著者名 大坪玲子・谷憲一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 424
3. 書名 嗜好品から見える社会（分担：第2章「音楽を嗜好する：キューバ音楽祭をめぐる愛好者たちの集会的実践」、コラム「キューバ・レコード市場・商品・消費のはざままで」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<ul style="list-style-type: none"> ・桜井敏浩評「生きている音楽 キューバ芸術音楽の民族誌」『ラテンアメリカ時報』No.1436 https://latin-america.jp/archives/50432 ・自著紹介「生きている音楽 キューバ芸術音楽の民族誌」東京大学『Tokyo Biblio Plaza』https://www.u-tokyo.ac.jp/biblioplaza/ja/A_00192.html ・書評 越川芳明著「カリブ海の黒い神々」『週間読書人』2022年10月28日号

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------